

国

語

(六〇分)

答えはすべて解答用紙に書き入れること。

一

次の文章を読んであとの問いに答えなさい。なお、問題の都合上、文章を一部省略している。

ヤーコプ・フォン・ユクスキュル「一八六四～一九四四」はエストニア生まれの理論生物学者。ハイデルベルク大学で動物比較生物学の研究に従事し、そのなかで「環世界」という概念に思い至った。

この発想が非科学的と思われたのか大学での職にはありつけず、フリーの身で研究を続けた。だが六十二歳のとき、ハンブルク大学に設立された環世界研究所の名誉教授となり、その後、一〇年間にわたり、若い研究者の指導にあたった。その後、ユクスキュルの見解はさまざまな分野に大きな影響を与えることになった。

ではユクスキュルの言う環世界とは何か？

私たちは普段、自分たちをも含めたあらゆる生物が一つの世界のなかで生きていると考えている。すべての生物が同じ時間と同じ空間を生きていてと考えている。ユクスキュルが疑ったのはそこである。彼はこう述べる。すべての生物がそのなかに置かれているような単一の世界など実は存在しない。すべての生物は別々の時間と空間を生活している！

これだけ聞くとSFのようである。そこで、ユクスキュルがその「チヨシヨ」^①『生物から見た世界』(一九三四年)の冒頭で掲げる実に印象的な事例を見ながら、その意味するところを考えていきたい。登場するのは、とても小さな生物である。

この本は「1」な田舎の情景の描写から始まる。

田舎に住んでいると、犬を連れて森や林のなかを歩き回ることも多いだろう。そんな人なら、茂みの小枝にぶら下がっている小さな動物について知っているに違いない。そいつはそこにぶら下がって、獲物を待ち伏せている。人間でも動物でもいい。

適当な獲物が見つかったら、それに飛びついて生き血を腹いっぱい吸う。そいつはもともとは一ミリか二ミリの小さな生き物だ。(A)、生き血を吸うやたちまちエンドウ豆大にふくれあがる。

哺乳類や人間の血を吸うこの不快な動物とは、ダニである。

正確にはマダニ。そのメスは交尾を終えると、八本の肢を使って適当な枝までよじ登る。よじ登ることに成功すると、哺乳類が近くに来るのを待つ。下を通りかかる小哺乳類の上に着くか、大型動物にこすりとられるのを待つのである。うまいこと哺乳類の皮膚に取りつくことができたなら、待望のその生き血を吸う。

さておもしろいのはここからである。ダニの狩りの様子は分かった。ではダニはどうやってこの狩りを行っているか？

まずどうやって待ち伏せの場所を見つけるのだろうか？ 実はこのダニは目が見えない。己の表皮全体に分布する光覚という器官を使って、光のあるなしをまさしく全身で感じ取るしかない。それなのに、なぜかうまく待ち伏せに適切な枝を見つけ、そこによじ登っていくのである。

(B) 待ち伏せの場所がうまく見つかったとして、今度はどうやって獲物の接近を知るのだろうか？ このダニは目が見えないのだった。ならばどうするか？ 音で？ いや実はこのダニは耳も聞こえないのだ。獲物が近づくとガサガサという音に反応することもできないのである。

ダニは枝で待ち伏せしている。その下を哺乳類が通るのを待つ。おそらく獲物は、自分の背丈の百倍以上も離れたところを通りかかる。そんなに遠くにいる獲物に向かって、目も耳も使えないこの小さな動物がダイブして飛びつこうとするのである。ダニはどうやってその「コウキ」^②をつかむのだろうか？

X

以上から分かるのは、ダニが三つのシグナルの連関に沿って動いているということである。

これら三つは「ジュンジョ」^③通りに続いて受け取られることではじめてシグナルとして意味をもつ。

整理しよう。

らく酸のおいをかぎとったダニはダイビングを試みる。どこかに着地する。着地の衝撃を感じると、もうらく酸のおい探はせず、三十七度の温度を探し始める。ダイビング行動があつてはじめて、三十七度の温度を探し始めるのであつて、らく酸のおいを嗅いでいないダニに三十七度の温度の場所を与えても、ダニは吸血場所を探し始めたりしない。

シグナル1の受信 ↓ シグナル2の探索 ↓ シグナル2の受信 ↓ シグナル3の探索……

ダニはこのように交代する三つのシグナルに沿って行動する。このような連鎖があつてはじめてそれぞれのシグナルは意味をなす。

国語

またダニはそのシグナル以外の情報をまったく受け取らない。たとえば実験室のなかでダニをどこか高いところに待機させておく。フラスコにでも入れたら酸を近づける。するとダニはそこから飛び降りる。飛び降りそうな場所には人工膜でも置いておく。そしてその温度を三十七度に保つようにし、膜の下にはただの水を置いておく。そうするとダニは人工膜の上で「吸血」行動を始める。「血」を吸い始めるのだ。

これだけ苦労して生き血をもとめるのだから、ダニは吸血鬼のように血の味を好む動物であると思われるかもしれないが、実際はそうではない。ダニは非常に敏感な嗅覚や触覚をもっているが、味覚は一切もたないことが分かっている。ダニは味を感じない。

(C)、らく酸のにおい、三十七度の温度などの条件さえ整えれば、ダニはどこからでも「吸血」しようとするのだ。らく酸のにおいがどこから来るとか、三十七度の温度を感じさせるものが何であるとかいったことはお構いなしである。ダニはいまあげた三つのシグナルだけで動いているからだ。それ以外の情報は受け取らない。言い換えれば、このダニは純粹に三つのシグナルだけでつくられた世界を生きている。

今度はすこし距離をとって、このダニの生活を眺めてみよう。

ダニを取り囲む環境は非常に豊かで、非常に複雑なものである。森のなかではさまざまなにおいが漂い、さまざまな音が飛び交っている。昼も夜もあり、光は絶えず変化する。風も吹けば、雨も降る。

しかしそうした現象はダニにとっては存在しない。狩りのために待ち伏せるダニが感じるのは、先に見た三つのシグナルだけである。だからダニの世界には、それ以外のものは存在していない。

もうすこし言葉を足そう。私たちは「ナニゲなく、^④ダニは枝の上で哺乳類が近くに来るのを待つ」と言ってしまう。さらには「うまく哺乳類が通ってくるとそれに飛びかかる」とも言う。

しかし、これは人間から見たダニの行動でしかない。よく想像してみたい。ダニは哺乳類を待っているのではない。ダニはらく酸のにおいを待っているのである。ダニの世界には哺乳類は存在しないのだ。ダニには哺乳類の姿など見えていない。飛びかかる獲物が鹿だとか犬だとか人間だとか、そういうことも認識しない。ダニはただらく酸のにおいに反応するだけだ。だからフラスコのらく酸にも反応するし、三十七度に温められた人工膜からも「血」を吸おうとするのだ。

ダニは私たち人間とはまったく異なる「世界」を生きている。(D) あなたが森に入れば、森の空気を感じ、光に目をやり、足場の悪さを気にかけるだろう。しかし、そんな環境を体験しているのはあなただけなのだ。その横で枝でじっと待つダニは、森の空気も、光も、足場の悪さもまったく感じてはいない。

当然このことはダニだけではなくて、あらゆる生物に当てはまる。私たちは頭のなかですべての生物が投げ込まれている「世界」なるものをイメージする。しかし、いかなる生物もそんな「世界」を生きてはいない。どんな生物もその生物なりの世界を生きているのだ。ダニが三つのシグナルから成る世界を生きているように。

(E)、そのような「世界」ではなくて、それぞれの生物が生きている世界を考える必要が出てくる。人間の頭のなかで、抽象的に作り上げられた、2な「世界」なるものではなく、それぞれの生物が、一個の主体として経験している、具体的な世界のことだ。

これこそが、ユクスキュルの言う「環世界」に他ならない。あらゆる生物はそれぞれがそれぞれの環世界を生きている。たとえばダニは三つのシグナルからなる環世界を生きている。

人間が頭のなかで抽象的に思い描く「世界」なるものごとを、ユクスキュルはとりあえず「環境」と呼んでいる。これは環世界を、私たちが普段想像する「世界」から区別するための言葉である。実際にはこの「環境」なるものは虚構である。だれも何も、そんな「環境」を生きてはいないからである。それぞれの生物はそれぞれの環世界を生きているのだ。

先ほどは非常に印象的なダニの環世界を例として取り上げてみた。だが人間についても同様のことが言えないだろうか？ 森で森林浴をしようとする散歩者、狩りをする猟師、森林の状態を検査する森林検査官、植物をサイシユウする植物学者。彼らは一つ同じ森を同じように経験するだろうか？

猟師は散歩者が気がつかないような遠くの動きや音を察知するだろう。植物学者は猟師が目にもとめず踏みつけてしまいさえする足下の植物に気がつくだろう。散歩するものは森の光や香りだけでもありがたいがたがるだろう。

森のなかではさまざまな主体が行動している。散歩者、猟師、森林検査官、植物学者、さまざまな動物、そしてダニ……。それらが同じ一つの森を経験しているなどとはとても言えない。たしかにそこには同じ一つの森が「環境」として存在すると想像はでき

国語

る。しかし、それは頭のなかで組み立てられたものにすぎない。実際に生きられている、経験されているのは、一つ一つの環世界だ。散歩者の森であり、猟師の森であり、森林検査官の森であり、植物学者の森であり、そしてダニの森である。

(國分功一郎『暇と退屈の倫理学』)

【語注】

(注1) 動物比較生理学 … 各種の動物の生理を比較し、一般的法則・変異などを研究するもの。

(注2) 虚構 … 事実ではないことを事実らしくつくり上げること。

問一 ――部①～⑤のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。(楷書で、ていねいに書くこと)

問二 (A) (E) に入る語として最もふさわしいものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上用いてはいけません。

- ア たとえば
- イ そうすると
- ウ つまり
- エ だが
- オ では

問三 ――部1「ユクスキユルの見解」とありますが、その見解の特徴を端的に表す四字熟語として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 八方美人
- イ 千変万化
- ウ 十人十色
- エ 三三五五
- オ 四方八方

問四 空欄 X には、次の文章が入る。後のア～エを正しく並び替え、文章を完成させなさい。

ア ダニがダイビングの成功を知るのは、その鋭敏な温度感覚によってである。ダニは自らの獲物である哺乳類の体温を知っている。その体温を感じ取ると、自らのダイビングの成功を知って次の行動に移るのである。

イ さて、運よくダニの待ち望んでいたにおいが漂ってきたとしよう。ダニは飛び降りる。だが、そのダイビングが成功する保証はない(繰り返すが、においを感じ取ったから飛び降りるというだけであって、獲物めがけて飛び込むことはできないのだ)。地面に落ちるかもしれないし、他の枝に引っかかるかもしれない。いずれにせよ、失敗すれば見張り場所となる枝までもう一度登らなければならない。ならばダニはどうやってダイビングの成功を知るのだろうか？ 耳も聞こえなければ、目も見えないというのに。

ウ ダニが哺乳類の接近を知るのは嗅覚によってである。ダニは視覚も聴覚もないが、非常に発達した嗅覚をもっている。哺乳類の皮膚からはらく酸と呼ばれる物質が発せられているのだが、ダニはそのにおいを嗅ぎとるのだ。このらく酸のにおいが、「見張り場から離れて身を投げろ」というシグナルとして働く。言い換えれば、ダニは見張り場所で、ひたすらこのにおいを待つのである。

エ この温度感覚は本当に鋭敏である。ダニは単に温かさを感じ取るのではない。ダニは正確に摂氏三十七度の温度を感じ取る。着地点が温かくとも、温度がそれ以上やそれ以下であったら、ダニは次の行動へと移らず、もう一度見張り場所に戻ろうとする。着地点の温度が摂氏三十七度であったならば、今度は触覚を使つてなるべく毛の少ない場所を探す。適当な場所が見つかるど獲物の皮膚組織に頭から食い込む。こうしてダニは温かな血液にありつく。

問五 文中の空欄 1・2 にそれぞれ当てはまる語として最もふさわしいものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|-------|-------|-------|-------|-------|
| 1 | ア 牧歌的 | イ 空想的 | ウ 神秘的 | エ 保守的 | オ 理想的 |
| 2 | ア 画的 | イ 主観的 | ウ 一時的 | エ 永久的 | オ 客観的 |

問六 ――部2「ダニは人工膜の上で『吸血』行動を始める」とありますが、なぜダニは二セモノの皮膚の上で血ではなく水を吸うのですか。八十字以内で説明しなさい。

国 語

問七 ――部3「ダニを取り囲む環境は非常に豊かで、非常に複雑なものである」とありますが、これはどのようなことを言ったものですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ダニは、「らく酸のにおい」「三十七度の温度」「毛の少ない皮膚組織」という吸血に関わるシグナル以外にも、自分の周囲に存在する様々な現象を認識しているということ。

イ ダニは、自分の周囲に存在する様々な現象の中から、「らく酸のにおい」「三十七度の温度」「毛の少ない皮膚組織」という自分の生存に関わるシグナルを選び取っているということ。

ウ ダニは、自分の生存に関わる吸血行動をするにあたって、周囲に存在する複雑な現象を認識することは出来ず、暗闇くらやみのような世界の中で運に任せて生きているということ。

エ 人間の目線から考えると、ダニが認識できる「らく酸のにおい」「三十七度の温度」「毛の少ない皮膚組織」以外にも、たくさん目の現象がダニの周囲には存在しているということ。

オ 人間の目線から考えると、ダニが認識している世界は様々なものがあふれた多様性のある世界であり、人間以上に優れた知覚を用いて吸血行動を行いながら生きているということ。

問八 本文における「環境」と「環世界」を、その違いを明らかにして、八十字以内でそれぞれを説明しなさい。

国語

なく、電池が入ったまま捨てた。壊れたなりにしっかりと秒を刻んでいるままの時計を捨てるときに、かすかに、生きている動物を捨てるような気持ちになった。

それはゴミ箱のなかでもしっかりと時を刻んでいただろう。そして火曜日のゴミの日になり、それはゴミ袋のなかに入れられる。やがて清掃局の車がそれを回収にくる。そのときでもそれは、何も知らずずっと時を刻んでいる。車はやがて焼却炉に到着し、他の大量のゴミとともに、それは炎のなかに投げ入れられる。

それはいつまで動いていただろうか。焼却炉の高温の炎で焼かれて、やがて死んでしまうとき、痛みを感じただろうか。

私はその時計をゴミ箱に投げ入れるほんの一瞬のあいだに、そんなことを想像して、ほんの少しだけ胸が痛くなった。そのとき、私とその時計とのあいだに、なにかの細いつながりができたのだ。

しかし、言うまでもなく、こんなことはたわごとである。時計は痛みを感じないし、それが動いているからといって、生きているわけではない。だからそれは死なない。

私とその時計とのあいだには、私の側の一方的な想像以外には、いかなるつながりも存在しない。

私はそのシユナウザーを心から愛していたし、いまでも愛している。また彼女も私のことを、心から愛していた。しかし彼女は、別に私に気を使って私がいらないあいだにわざと死んだのではない。彼女はそのときに、ただ単に死んだのだ。そして、死んでしまった彼女は、もうどこにもいない。私は彼女の匂い、声、仕草、重さ、手触りをはっきりと覚えているが、彼女のほうはもう私のことは何も覚えていないだろう。そもそももう存在すらしていないのだから。

私たちの人生には、欠けているものがたくさんある。私たちは、たいした才能もなく、金持ちでもなく、完全な肉体でもない、このしょうもない自分というものと、死ぬまで付き合っていかなくてはならない。

私たちは、自分たちのこの境遇を、なにかの罰だと、誰かのせいだと、うっかり思ってしまうことがある。しかし言うまでもなく、自分がこの自分に生まれてしまったということは、何の罰でも、誰のせいでもない。それはただ無意味な偶然である。そして私たちは、その無意味な偶然で生まれついてしまった自分であるままで、死んでいくほかない。他の人生を選ぶことはできないのだ。

ここにはいかなる意味もない。

私たちは、私たちのまわりの世界と対話することはできない。すべての物の存在には意味はない。そして、私たちが陥っている状況にも、特にたいした意味があるわけではない。

そもそも、私たちがそれぞれ「この私」であることにすら、何の意味もないのである。私たちは、ただ無意味な偶然で、この時代のこの国のこの街のこの私に生まれついてしまったのだ。あとはもう、このまま死ぬしかない。

ジャズでもボサノバでも演歌でも、ある好きな歌があって、それをひとに聴かせるときに、その歌そのものを聴かせなければならぬ、ということ、当たり前のことではあるが、とても興味深いことだ。

たとえば私たちは、その歌のことを、言葉で表現することはできない。言葉によって、その歌の特徴や感じを描くことはできるが、その文字列を目にしたときに、その歌そのものが実際に耳に聴こえてくるような、そんな文章を書くことは絶対にできない。

子どものときに、自分の部屋に、小さな丸い石や、ガラスのかけらや、四角い磁石や、きらきら光る金属片などの「きれいなもの」を集めていて、ひまがあるとそれを手にとって、いつまでも眺めていた。そのときに私がしていたのは、それらを擬人化して、言葉によって会話するということではなかった。私はそれを、ただ見ていたのだ。

私とシユナウザーのあいだには、^④言葉によらない強い愛があった。彼女のまなざしや、耳の動きや、鼻の鳴らし方から、私はすべてを受け取ることができた。

私が小石やガラスや犬から学んだことは、黙ってそばにいる、ということだった。

国 語

【語注】

(注1) 大学一回生 …… 主に関西地方で、大学の一年生をいう。
(注2) ジャズでもボサノバでも演歌でも …… それぞれ音楽のジャンルのこと。

問一 ~~~~~部A~Cの語句の本文中の意味として最もふさわしいものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A 「つきつきりぞ」

ア ちょうど一月の間

イ 自分ひとりだけの力で

ウ 誰にもじゃまされないで

エ たえずそばにつきそって

オ 突きはなして放っておいて

B 「氣にやんでいる」

ア つらい出来事を忘れようと、何も考えないように心を落ち着かせている

イ 自分のせいだと考えて心がくじけてしまい、身動きができないでいる

ウ 一つのことにながらわかれて、繰り返しそのことばかりを考えている

エ 彼女が生きていたころの楽しかった思い出が思い出せず悲しんでいる

オ 死なせずにすませることができた方法を今さらながら考え続けている

C 「気休め」

ア 孤独な犬の死を真面目から受け止めることなく、自分の苦しさから逃げようとする考え方

イ 犬の死の際を見てやれなかったことは、用事で仕方なかったのだと人のせいにする考え方

ウ 天国の犬とつながっている気分になって、死んだ犬がまるでまだ生きていると思う考え方

エ ひとりで死んだと解釈して、飼い主に気を使って死んだ犬の思いを台無しにする考え方

オ 犬がまだ心の中で生きていると信じることで、死んだ事実をなかったことにする考え方

問二 ~~~~~部①「なにも解釈せずに、ただそのものを知」ることの例として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 田舎に行ったとき、明るい都会と違う真っ暗な田舎の夜空に浮かぶたくさんの星座を観察した。

イ 町を歩いていると信号が青から赤に変わったので、ルールを守って道路を渡らず立ち止まった。

ウ 友人がだまって泣いている姿を見て、彼の悲しみが自分にも伝わり、もらい泣きしてしまった。

エ 書道の展覧会で、半紙にのせられた墨の黒々とした光沢とそのかすれ具合に見入ってしまった。

オ 彼が誰よりも優れたテニスプレイヤーであることは、全国大会で優勝したことが証明している。

問三 ~~~~~部②「死んだ、ということがすぐにわかった」とあるが、なぜ筆者はそのことがわかったのか。四十字以内で説明しなさい。

なご。

問四 ~~~~~部Xに入る適当な言葉として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 抽象化 イ 正当化 ウ 絶対化 エ 擬人化 オ 言語化

問五 ~~~~~部③「とてつもなく孤独なことだ」とはどういうことか。解答欄にあうように本文から三十字以内でぬき出して答えなさい。

なご。

問六 ~~~~~部④「言葉によらない強い愛があった」とはどういうことか。本文全体をふまえて六十字以内で説明しなさい。

国 語

問七 本文は次の文章Aで締めくくられている。本文と文章Aを読んだ生徒たちのやりとりを読み、この文章全体の内容に**合わない発言**を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

【文章A】

あるとき夕方に、淀川の河川敷を散歩していた。ひとりのおばちゃんが柴犬を散歩させていた。おばちゃんは、おすわりをした犬の正面に自分もしゃがみこんで、両手で犬の顔をつかんで、「あかんで！ちゃんと約束したやん！家を出るとき、ちゃんと約束したやん！約束守らなあかんやん！」と、犬に説教をしていた。

柴犬は、両手で顔をくしゃくしゃに揉まれて、困っていた。

犬と約束するおばちゃんは、擬人化しているというよりは、人と犬との区別がつかなくなっている、ということだと思う。それは擬人化よりもっと自然な状態だ。むしろあのおばちゃんは、人と人以外を区別しないひとなのだと思う。家の中でも外でも、植木鉢、人形、テレビ、台所、犬、猫、人、家、電車、すべてのものが平等に生きているのだろう。

そういう人生のあり方は、それはそれでとてもよいものだ。

- ア 生徒A | 人間と同じように犬に話しかけるおばちゃんがでてきたね。言葉によらない愛があると言っていたのに、筆者は彼女のことを「自然」で「とてもよい」と肯定している。
- イ 生徒B | そうだね。ここで大事なのは、彼女が人と人以外の区別をしていないということだと思うよ。犬も植木鉢もすべてのものが彼女の前では平等に生きている。
- ウ 生徒C | そうすると、犬を犬として受け入れる筆者と、犬を人間のようにあつかう彼女の生き方は正反対だよ。犬には「約束」なんて分かるわけがないし。自分と違う生き方として筆者は彼女を肯定しているのだよ。
- エ 生徒D | でも、筆者と彼女はすべてを区別していないという点で同じではないかな。その意味では二人ともすべてのものと平等につながっていると言えるのではないかな。
- オ 生徒E | 言葉が通じないものであるとすれば世界は孤独だと筆者は述べていたけれど、彼女は筆者と同じようにすべてとつながることができて、孤独ではないということなんだね。



240106-10

↓ここにシールを貼ってください↓

受験番号	氏名

※のらんに何も書かなじ。

一											
問一	問二	問四	問六	問七	問八						
①	A	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
②	B	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
③	C	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
④	D	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
⑤	E	問五	1	問二	2						
※	※										
80	60	40	20	80	60	40	20	80	60	40	20

二											
問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七					
A	B	C									
	</										